

2021年2月27日

中央大学ライティング・ラボ

2020年度後期活動報告書

抄録

2020年度後期も、前期から継続して遠隔セッションを実施した。オンラインセッションへの周知度も上がり、卒論・ゼミ論のシーズンでもあったため、前期よりも利用が促進された。セッション数は355件、稼働率は60.4%であった（I-3）。従来は、文学部の卒論提出締め切り後は利用学生が減少したが、今年度は1月も他学部の学生が卒論・ゼミ論でセッションを利用した。このことから、全学でラボの周知が進んでいるといえよう。また、今学期は、前期の課題となったオンラインセッションに関する研修と広報に取り組んだ。さらに、オンライン授業に伴い合理的配慮の必要な学生への支援というラボの新たな役割も生じている。

まず、今学期は研修を充実させることで、オンラインセッションの質の向上、チューター間の交流を図った。オンラインセッションの質の向上に関しては、グーグルドキュメントを使った文章共有、オンラインセッションにおける適切な目標のたてかた、有効な質問の仕方などについての研修を行った結果、前期より質の高いオンラインセッション提供に繋がった。チューター間の交流については、ミーティング内で交流機会を設けることで促進を図った。チューター相互の結びつきが強まったことで、セッションスキルの移転やチューター相互の支援などが可能となった。

次に、教員への広報とツイッターによる広報の強化を行った。教員への広報は、一律のメール配信に加えて、チューターがTAをしている講座、院の所属ゼミなどの担当教員に個別に依頼し、オンラインガイダンスを実施した。一律のメール配信ではオンラインガイダンスのニーズが掘り起こせなかったが、個別連絡をすることでニーズの掘り起こしにつながった。ツイッターは、フォロワー数・リツイート数から宣伝効果の低さが明らかであったため、フォローするアカウントの見直しを実施した。対面セッションからオンラインセッションへの切り替えに伴い、広報も従来の手法の再検討が必要であった。

最後に、合理的配慮の必要な学生への支援は従来から実施していたものの、オンライン授業への切り替えに伴いレポート課題が増えたことにより、支援の必要性が増している。今学期は法学部と理工学部のキャンパスソーシャルワーカーと連携をとり支援を実施した。学習支援において合理的配慮をするための施設として、新たなラボの役割も期待される。

以上

はじめに

2020 年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
I では開室状況と利用実績、II ではセッション以外の活動、III では来期に向けて特筆すべき
所見を述べる。

I 開室状況と利用実績

I-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2020 年 9 月 21 日から 2021 年 1 月 21 日までの月曜・火曜・水曜・木曜

開室日数：56 日（前年度 56 日、2020 年度前期 36 日）

設置セッション数：588 コマ（前年度 821 コマ、2020 年度前期 261 コマ）¹

スーパーバイザー（SV）：中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー（ASV）：峰尾菜生子

シニア・チューター 2 名

チューター 13 名（一人当たり 2～8 コマ担当）

I-2 受付方針（2020 年度後期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート及び発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、
投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド用・口頭用）、研究計画書、ボランテ
ィアセンター報告書、総合政策部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章（例年は予約不可）

奨学金応募書類に含まれる志望動機書

留学志望書

公務員試験練習課題

そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

外国語／日本語翻訳（授業の課題のみ）

¹ 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）

メールや手紙の文章

公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

1-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数（延長を含む）：355件（前年度564件、2020年度前期129件）

セッション稼働率：60.4%（前年度稼働率68.7%、2020年度前期49.4%）

セッションの稼働実態を把握するため、以下に、週毎の稼働率の推移（図1）、週別・曜日別のセッション数と稼働率の表（表1、表2）を示す²。

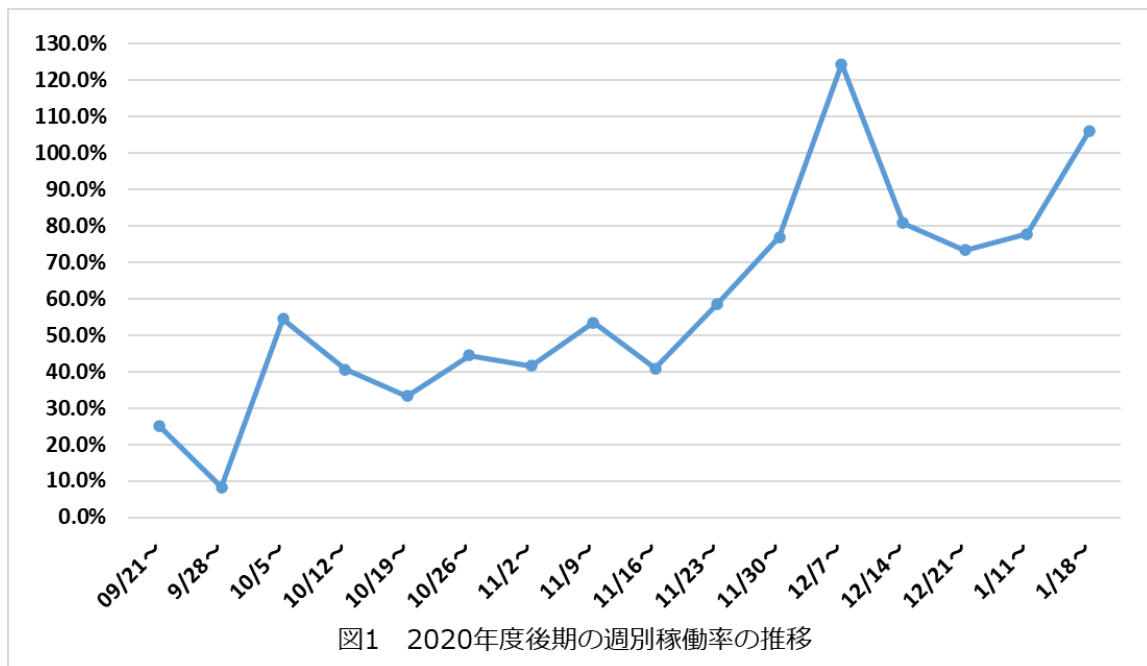


図1 2020年度後期の週別稼働率の推移

注) 100%超の週は、提出期限直前等の学生対応のため、設置数より多くセッションを行った週である。

表1 週別・曜日別セッション数・稼働率（9月第3週～11月第3週）

² 今年度は例年と異なる開室状況のため、例年報告している月別の稼働率、ライティング・ラボ開設時からの利用学生数の推移は記載しない。代わりに週ごとの稼働率を示した。

		09/21~	9/28~	10/5~	10/12~	10/19~	10/26~	11/2~	11/9~	11/16~
月	設置数	8	8	8	8	12	12	12	12	12
	稼働数	2	0	4	4	4	6	9	7	9
	稼働率	25.0%	0.0%	50.0%	50.0%	33.3%	50.0%	75.0%	58.3%	75.0%
火	設置数	8	10	6	9	6	6	/	6	8
	稼働数	0	3	4	5	0	2	/	7	2
	稼働率	0.0%	30.0%	66.7%	55.6%	0.0%	33.3%	/	116.7%	25.0%
水	設置数	4	4	4	4	8	/	8	8	8
	稼働数	2	0	2	0	5	/	5	2	2
	稼働率	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	62.5%	/	62.5%	25.0%	25.0%
木	設置数	16	14	15	16	16	/	16	17	16
	稼働数	5	0	8	6	5	/	1	7	5
	稼働率	31.3%	0.0%	53.3%	37.5%	31.3%	/	6.3%	41.2%	31.3%
計	設置数	36	36	33	37	42	18	36	43	44
	稼働数	9	3	18	15	14	8	15	23	18
	稼働率	25.0%	8.3%	54.5%	40.5%	33.3%	44.4%	41.7%	53.5%	40.9%

表2 週別・曜日別セッション数・稼働率（11月第4週～1月第3週および後期全体）

		11/23~	11/30~	12/7~	12/14~	12/21~	1/11~	1/18~	後期全体
月	設置数	/	12	12	12	16	/	16	160
	稼働数	/	3	17	14	9	/	17	105
	稼働率	/	25.0%	141.7%	116.7%	56.3%	/	106.3%	65.6%
火	設置数	5	6	6	8	14	/	7	105
	稼働数	5	8	9	9	13	/	9	76
	稼働率	100.0%	133.3%	150.0%	112.5%	92.9%	/	128.6%	72.4%
水	設置数	8	6	7	8	/	10	8	95
	稼働数	9	6	6	3	/	9	10	61
	稼働率	112.5%	100.0%	85.7%	37.5%	/	90.0%	125.0%	64.2%
木	設置数	16	15	16	19	/	17	19	228
	稼働数	3	13	19	12	/	12	17	113
	稼働率	18.8%	86.7%	118.8%	63.2%	/	70.6%	89.5%	49.6%
計	設置数	29	39	41	47	30	27	50	588
	稼働数	17	30	51	38	22	21	53	355
	稼働率	58.6%	76.9%	124.4%	80.9%	73.3%	77.8%	106.0%	60.4%

注) 100%超の週は、提出期限直前等の学生対応のため、設置数より多くセッションを行った週である。

【所見】

今期の実施セッション数は、前年度比 62.9%であった。また、稼働率は前年度に比べて約 10 ポイント低下した。実施セッション数の減少の主な要因は、WebEx を利用して遠隔でセッションを行うという特性上、セッション設置数を制限せざるを得なかったためである。稼働率の低下の主な要因は、各種ガイダンスの中止・変更やオンライン授業により、例年に比べて広報活動が制限されてしまったためと考えられる。例年よりも広報活動が制限されているため、学生の間での認知度が低かったと推測される。以上のような要因により、セッション実施数、稼働率ともに昨年度より大幅に減少したと考えられる。

しかし、遠隔セッションを開始した今年度前期と比べると、実施セッション数は 200 件以上増加した。全体のセッション稼働率も約 10 ポイント上昇した。前期に比べて実施セッション数や稼働率が増加した要因として、主に次の 4 点が考えられる。第一に、セッション設置数自体が増加したためである。後期は授業開始と同時に遠隔セッションを開始したため、前期よりも設置セッション数自体が増加した。また、11 月より新人チューター4 名がセッションを担当することになったため、設置できるセッションの枠が増加した。第二に、前期に利用した学生が継続的に利用しているためである。第三に、ゼミ論文や卒業論文、修士論文の作成のために利用する学生が増加したためである。第四に、前期よりも広報活動を強化した結果、認知度が高まったためである。II-2 で述べるように、後期はオンラインガイダンスや Twitter による広報活動を強化した。特にオンラインガイダンスは、実際に学生に対してライティング・ラボを紹介するため、利用促進につながったと推測される。以上 4 点の要因によって、前期よりも実施セッション数や稼働率が増加したと考えられる。

図 1 に示した週別の稼働率をみると、学期末が近づくとつれて上昇している。9 月中は 30%未満、10 月から 11 月にかけては 40%から 50%程度、12 月以降は稼働率が 70%以上となっていた。特に、12 月第 1 週と 1 月第 3 週は 100%を超えていた。学期末に近づくとつれて稼働率が上昇した主な要因として、期末レポートを課す授業が多いこと、学年末にゼミ論文や卒業論文、修士論文の提出期限が設定されていることが考えられる。稼働率が 100%前後の状態が続くと、チューターの疲労蓄積や超過勤務、セッション以外の業務に割ける時間の減少など、運営上の問題が出てくる。各週 70%程度の稼働率となるよう、来年度は利用者が比較的少ない 10 月頃の利用推奨を強く呼びかけていきたい。

1-4 利用学生の内訳³

*利用学生数（延べ）⁴

2020 年度後期合計 355 名（前年度 564 名）

³ 今年度は利用学生が留学生かどうかはたずねていないため、日本人学生と留学生の内訳は記載しない。

⁴ 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

* 利用学生の所属

法学研究科	6名
経済学研究科	13名
商学研究科	3名
文学研究科	56名
総合政策研究科	15名
理工学研究科	7名
法学部	41名
経済学部	26名
商学部	25名
文学部	124名
総合政策学部	23名
国際経営学部	3名
理工学部	13名

* 利用学生の学年

学部1年	55名
学部2年	10名
学部3年	48名
学部4年	132名
学部5年以上	10名
博士課程前期／修士	30名
博士課程後期	70名

1-5 相談文章の種類

卒業論文・修士論文・博士論文	181件
授業のレポート	78件
投稿論文	53件
研究計画書	13件
授業の発表資料	23件
学外で発表予定の発表資料	7件

【所見】

利用学生の所属内訳からは、特に文学部・文学研究科の利用が多いことがわかる。利用者の少ない学部や研究科の利用促進に向けて、広報活動に力を入れるとともにニーズを探っ

ていきたい。遠隔セッションであったため、理工学部や理工学研究科の学生の利用もあった。多摩キャンパス以外の学生も利用できるよう、今後は遠隔セッションの拡大を検討する必要がある。

学年の内訳をみると、利用者の40%弱が学部4年生であった。相談文章の50%以上が卒業論文・修士論文・博士論文であった。学部1年生の授業レポートの相談が多かった前期と比べて、学年末の論文提出の利用が中心であったことがうかがえる。この傾向は、昨年度までの対面セッションと同様である。一方、中間の学年にあたる学部2年生の利用は、他の学年に比べて利用が少なかった。レポートや論文以外にも授業での発表資料なども対象文章としていることを広く周知して、中間の学年の学生のニーズにも答えていきたい。

1-6 遠隔セッションに対するチューターの評価⁵

後期の業務を振り返って業務を改善するため、遠隔セッション（オンラインセッション）に関してチューターアンケートを実施した。主な質問項目と結果は以下の通りである。

1-6-1 オンラインセッションでやりにくかったことや困ったこと

オンラインセッションにおける主な困難として、「利用学生の反応を把握することの難しさ」「学生やチューターのパソコンの操作能力やパソコン周辺環境の問題」「機器の使いにくさ」「紙媒体と異なる不便さ」が挙げられていた。

一方、Google ドキュメントを利用した文章共有方法を導入した結果、前期に挙げられていた「対応におけるタイムロス」や「メモの取りにくさ」の問題は概ね解消された。

1-6-2 オンラインセッションでやりやすかったことや良かったこと

オンラインセッションの主なメリットとして、「利用学生との共同作業のしやすさ」「利用学生の緊張緩和」「移動にかかる負担が少ないこと」が挙げられていた。特に、Google ドキュメントを利用した文章共有方法によって、学生と一緒に書き込んだり、調べ物をしたりといった作業をセッション中に取り入れやすくなったという声が多かった。

1-6-3 対面セッションとオンラインセッションで異なる点

対面セッションとオンラインセッションで異なる点として、「利用学生の反応の把握のしやすさ」「利用学生との共同作業のしやすさ」「ツールの活用能力の差」「資料共有のしやすさ」「資料管理のしやすさ」「マッピングのしやすさ」などが挙げられていた。

⁵ 今年度はセッション時の煩雑さを避けるため、利用学生へのアンケートは実施しなかった。

Ⅰ-6-4 オンラインセッションで有効であったツールや方法

オンラインセッションで有効であったツールや方法としては、後期から導入した Google ドキュメントでの文章共有方法が最も多く挙げられていた。

【所見】

アンケートから、遠隔セッションにおける主な困難として、(1)利用学生の反応が把握しづらい、(2)学生やチューターのパソコンの操作能力やパソコン周辺環境によってセッションの行いやすさに差が出てくる、といった点があることがわかる。

後期から Google ドキュメントを利用した文章共有方法を導入した結果、前期に生じたタイムロスやメモの取りにくさといった問題は解消された。また、チューターと学生とがセッション中に一緒に作業しやすくなった。チューター自身が前期よりも遠隔セッションに慣れてきたため、さまざまな文章共有方法を活用するなど、臨機応変にセッションを行えるようにもなった。

チューターの遠隔セッションスキルの向上や、ライティング・ラボ全体における遠隔セッションのノウハウの蓄積によって、遠隔セッションでできることが広がっている。学生にとってもチューターにとっても遠隔セッションにはさまざまなメリットがあるため、Covid-19 の感染状況によらず遠隔セッションを常時設け、対面セッションとの併用を検討していく必要がある。

Ⅱ セッション以外の活動

Ⅱ-1 IT 関連業務

Ⅱ-1-1 HP 管理

従来の学内システムを利用した HP に、キャンパス外からはアクセス不可能なため、2020 年度前期に google のホームページを利用し、臨時 HP を立ち上げ、後期も継続利用した。来期以降、学内システムの変更が予定されているため、これを機に、臨時 HP を正 HP に変更すべく整備していく。

ライティング・ラボ 新規 HP アドレスは以下の通り。

<https://sites.google.com/view/chuo-writinglab/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

Ⅱ-1-2 セッションデータ管理

前期同様、後期も学生文章及びセッション報告はドロップボックスにて共有した。ドロップボックス管理担当のシニアチューターを中心に、ドロップボックス内整理をこまめに実

施したため、大きな混乱はなかった。ただし、ドロップボックスの各自無料使用容量に上限もあることから、2021年以降のデータ管理方法について来期以降検討する。なお、2021年度以降もオンラインでのデータ管理を実施したい。

【所見】

来期以降オンラインセッションと対面セッションの同時開室するにあたり、予約管理、HP管理、学生データ管理など付帯業務が増加・煩雑化する。セッション自体に支障が出ないよう、また、チューターに過度な負担がかからないよう、セッション以外の業務を円滑に実施する体制作りが求められる。また、google フォームを利用したネット予約やドロップボックス使用等、外部アプリに依存した状況は脆弱でもあるため、学内ネットワークを利用したネット予約やデータ管理に将来的に移行することが望ましい。

II-2 広報活動

II-2-1 オンラインガイダンス

オンラインガイダンスの教員からの依頼が低調なため、チューターがTAを務める講義や所属するゼミ等を担当する教員に個別連絡をとり、オンラインガイダンスを6件実施した。メールやレター等の一律的な広報に加えて、個々の教員への広報活動がラボの周知度向上に効果的であるといえよう。

II-2-2 ツイッター

ツイッターのフォロワー数、リツイート数からは、現状大きな宣伝ツールにはなっていないことが明らかである。そのため、学部ゼミアカウントまた学内施設アカウントのフォローをし、ラボのツイッターへのアクセス数を増やす工夫をした。来期は、ツイッターの有効性を検討するとともに、宣伝効果を上げるための工夫をしていきたい。

【所見】

オンラインガイダンス以外に、教員2名がmanaba上の掲示板にてラボを推奨くださった。教員に向けた宣伝も一律的な方法に加えて、個別対応し、オンラインガイダンスの利用数をあげ、学生のラボ利用促進につなげたい。来期は、週5開室となり、セッション設置数も増加予定のため、ツイッターも含め学生への宣伝を工夫していきたい。

II-3 配信資料

前期、作成したセッション用配信資料について、STを中心に編集作業を実施した。語句や表現の統一、例文のオリジナル化、引用マナーの確認などの作業をし、来期以降最終版が

完成予定である。最終版の完成後、配信資料の利用方法を検討したい。
他大学では、アカデミック・ライティングの手引書を HP からダウンロード可能とする、冊子にして学生に配布する等を通して、学生に資料提供を実施している。

II-4 研修

II-4-1 新人チューター研修

後期着任の新人チューター4名の研修を実施した。

- * アカデミック・ライティング支援の概要、中大の取り組み、ラボの理念について
- * チューター業務内容について
- * セッションの進め方等セッションに関して
- * 配信資料の使い方について
- * 文章診断練習
- * 模擬セッション
- * 先輩チューターによるセッション見学

などを約1ヶ月半かけて実施した。オンラインによる新人研修2度目の後期はスケジュールに沿って研修を実施できた。12月には4名とも独り立ち審査(SVが審査)に合格し、チューター業務を一人でこなしている。

II-4-2 チューター研修

前期で課題となった、チューター同士の交流機会の確保、及びオンライン特有のセッションスキルの研鑽を中心に研修を実施した。チューター同士の交流機会の確保は全体チューター研修で、オンライン特有のセッションスキルの研鑽は勤務時間内研修で実施した。

《全体チューター研修》

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 10月1日(木) | オンラインセッションにおける学生の作業 |
| 10月15日(木) | オンラインセッションでのセッション目標をたてるときの注意 |
| 11月5日(木) | わかりやすい質問の仕方 |
| 1月14日(木) | 新人チューターのための相談会 |

《曜日内研修》

- * グーグルドライブで文章を共有してセッションを実施する方法
- * 文章診断と模擬セッション
- * 自分が担当したセッションの振り返り

【所見】

前期課題となった、「オンラインでの体系だった新人研修の実施」「チューター同士の交流機会の確保とオンラインセッション特有のスキル研鑽のための研修」を実施することができた。研修を工夫し、充実させることで、オンラインでの新人研修も十分可能であることが明らかになった。また、対面で集合できなくとも、オンライン上でチューター同士の交流を図る、セッションスキルの研鑽をすることが可能であることも明らかとなった。オンライン上での制約はあるものの、できる限りの工夫をすることで、来学期以降もセッションの質向上、セッションしやすい場の提供につなげていきたい。

II-5 中央大学杉並高等学校へのチューター派遣

別添1参照。

II-6 合理的配慮の必要な学生への対応

法学部及び理工学部のキャンパスソーシャルワーカーからの紹介で、合計4名の合理的配慮の必要な学生へのセッションを実施した。キャンパスソーシャルワーカーからの連絡を受け、SV及びASVが学期中継続してセッションを担当した。

キャンパスソーシャルワーカーと連携したアカデミック・ライティング支援を合理的配慮が必要な学生に向け実施することで、学習支援という方法面での合理的配慮の実施につながるといえよう。

III 来期に向けた所見

III-1 チューター公募

来学期以降は週5日開室、および対面セッションとオンラインセッションの同時開室を安定して実現するため、チューター育成に力をいれたい。

III-2 オンラインセッションと対面セッションの同時開室

来学期よりアカデミック・サポート・センターの一部門として全学にセッションを提供する予定である。またコロナ対応も継続的に必要であるため、オンラインセッションと対面セッションの同時開室を実施する。それに合わせて、煩雑化する事務作業への対応、チューター増員、ラボの周知度の向上など様々な課題が見込まれる。

事務作業については、予約受付方法、課題文章の受け渡し方法、課題文章とセッション報告の保存方法等を検討し、事務作業へのチューターの負担を減らし、セッションに注力できる環境整備をしていきたい。

チューター増員については、チューター公募と新人チューター研修を通して、質の高いチューター確保に努めたい。

ラボの周知度の向上については、後期に実施した宣伝方法の再検討も必要であるが、学生へのアンケートを再開するなどして、学生ニーズの掘り起しも実施したい。

III-3 シニアチューター育成

来期より週5日開室するが、SV,ASV,STのいずれかが在室できるような体制が好ましい。来学期は、シニアチューター2名の協力を得ることができ、毎曜日ともSVまたはASVに加えてST1名が在室するという形で開室を行う。しかしながら、2021年秋学期には、シニアチューターの勤務日減が確定しているため、来学期中にシニアチューター育成を行いたい。

以上

2021年2月27日

スーパーバイザー 中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー 峰尾菜生子

別添 1

2020 年度中央大学ライティング・ラボ

中央大学附属杉並高校遠隔セッション実施報告書

2020.11.16(月)

担当チューター：黒田 将司

1. 開室日時

- ・ 10月8日(木)・22日(木)・29日(木)・11月5日(木)の4日間。
- ・ 各日①15:50~16:30、②16:40~17:20、③17:30~18:10にて実施。

2. セッション設置数・実施数・稼働率

(1) 設置数

各日3セッション×4日間=計12セッション設置。

(2) 実施数

計11セッション実施。

(3) 稼働率

稼働率=実施数÷設置数=11÷12=91.6%(小数点第2位以下切り捨て)

3. 相談が多かった内容

相談内容をアカデミック・ライティングの観点から分類しランキング形式で集計したところ、以下の結果となった。

1位：問いと答え(7件)

2位：構成と構成要素、主張と根拠、文・図表の引用(各5件)

3位：論点の明確化、学術的文章の表現(各4件)

4位：語句の明確化、パラグラフ・ライティング(各1件)

4. セッション運営において良かったこと・困ったこと

(1) 良かったこと

- ・Google ドキュメントを利用することで文章の共有がリアルタイムで可能になったこと。
- ・事前に質問内容や先生のコメント、ふせんマップ等の情報が提供されていたため、利用者が置かれている状況や悩んでいる点の把握が可能になったのみならず、チューター側もセッション方針を立てることが可能になったこと。
- ・事前にセッション実施のための環境が整備されていたため、円滑にセッションを実施することが可能になったこと。

(2) 困ったこと

- ・オンラインの特性上、対面と異なりコミュニケーションに若干時間を要する場面が見られ、セッションの時間配分に影響が出た。
- ・40分という限られた時間内で全ての項目を検討することは不可能であるため、複数悩みを有した利用者のセッションにおいて検討できなかった項目が生じた。
※今回は各学生が事前に提出していた「質問への回答」にて補足した。

5. 分析・考察

- ・利用率が9割越えと非常に高かったことから、オンラインを利用したセッションの実施に関する需要が高かったものと考えられる。したがって、今後はセッション設置数の増加を検討すべきと考えられる。
- ・相談内容に関しては、論文として成立しているか否かという悩みを基点にした相談が多く、特に問いと答えや構成内容に関する質問が最も多く見られた。また、内容に関する主張に関する根拠の提示や引用に関する質問が多く見られた。このことから、論文の体裁に関する悩みと主張－根拠間との関連性に関する悩みを有する学生が多かったと考えられる。
- ・セッション運営に関して、中杉担当者－チューター間の連絡および情報共有が円滑に行われていたため、セッション環境に関しては問題なく整備できたと考えられる。そして、学生間とのやり取りに関しては、Google ドキュメント等のアプリを利用することで

アルタイムでの文章共有が可能になり、大学で実施しているのと同程度の検討が可能になった。しかし、オンライン特有の問題および時間上の制約という理由から、検討できる内容が限定され、一部不満が生じるという問題が生じた。したがって、学生とのやり取りという視点から、質問内容または検討したい内容をあらかじめ 1 つに絞り、かつ時間の制約上全てを検討できるわけではない旨を事前に告知する必要があると考えられる。

以 上